

## 令和5年度 豊能二次医療圏病院連絡会結果（概要）

開催日時：12月12日 場所：池田商工会議所 2階 会議室

出席病院：別添一覧

### 1 地域医療構想の推進に関する意見

- 箕面市立病院の再編後に確保を計画していた回復期リハビリテーション病棟について、病院が計画を見直し、急性期病床の確保に変更するということであるが、この計画が地域で認められれば、新しく急性期病床の確保が出来るようになるという事である。
- 参考資料4「豊能二次医療圏における各医療機関の診療実態」は、病院からの自己申告のデータであり、過去に誤って報告した内容が修正されない。特に、救急搬送については、正確なデータで情報共有すべきなので、ORION（大阪府救急搬送支援・情報収集・集計分析システム）のデータを使用すべきでないか。

### 2 病院の将来プランに対し意見のあった病院とその回答

#### （1） 公立・公的病院

##### ●箕面市立病院

（病院への意見）

- ・新設予定の緩和ケア病床は、自院の急性期の患者を対象とする予定か。

（病院の回答）

- ・自院の急性期患者を対象とし、症状のコントロールや在宅医療へ移行を図る予定。ホスピスへ移行する患者については、ガラシア病院等のホスピス患者を診ることのできる病院へ転院させる予定。

（病院への意見）

- ・急性期病院として運営されることを希望するが、当初は、再編後も回復期リハ病棟を確保するという説明であったため、他院の理解を得る努力が必要。

##### ●市立吹田市民病院

（病院への意見）

- ・繰入金等の状況について、経営上の問題があるか説明してもらいたい。
- ・回復期リハ病棟は74%の稼働となっているが、民間病院なら赤字病棟のデータである。回復期リハ病棟の継続は病院の経営上の問題にならないのか教えてほしい。
- ・公立病院の機能として回復期リハ病棟を持つことが妥当かどうか。当圏域には十分な回復期リハ病棟がある中で必要なのか問われている。
- ・国立循環器病研究センターに隣接しているので、連携するのであれば、市立吹田市民病院の脳外科や循環器科は国立循環器病研究センターに任せたらよい。

- ・回復期リハに関しては民間病院ができる医療だが、国立循環器病研究センターとの関係で特別な患者を診るということであれば理解できるかもしれない。

#### (病院の回答)

- ・経常損益は新型コロナウイルス感染症の影響で変動があるが、修正医業収支比率は目標値94%のところ、令和4年は91%となっており、目標値を目指して取り組んでいる。
- ・稼働率が低く70%台だと指摘されたが、新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生したため低くなっている。コロナ禍前は、目標値が90%で、実際に90%に達していた。(診療報酬の)加算の関係もあり、重症度の高い患者を受け入れていることも稼働率が低くなっている要因。
- ・当院は、国立循環器病研究センターとの連携のために回復期リハ病床を設置したことから、患者の大部分を国立循環器病研究センターからの脳血管疾患患者などの受け入れをしている。また、総合病院として回復期リハ病床において複数の疾患を持つ患者を診ており、今後も同機能を継続する方針。

## (2) その他、民間病院等

- 意見なし

## 3 その他(保健所別グループ意見交換での意見)

【テーマ：転退院調整の円滑化について】

### ●池田保健所

- 転退院に関する連携は比較的うまくいっている。
- 誤嚥性肺炎のパスを使用し、ポストアキュート病院への転院が円滑に進んでいる。
- 在宅医が増えており、転退院先の選択肢が広がっている。
- 高次救急を求められた時にすぐ対応できる病院が不足している。
- 圏域内からの紹介は円滑に受け入れできているが、紹介状に必要な情報がない等、大阪市内の病院からの紹介に困ることがある。
- 患者情報は転院調整の際、受け入れ側に正確に伝えるようにしてほしい。
- 転退院調整の際、転院させる病院は、患者と家族の意向を極力一致させるようにしておいてほしい。
- 各病院の地域連携室の担当者同士、顔の見える連携ができると良い。対面での会議やICTの活用があると良い。
- 受け入れ協力のため、受け入れ病院側の医師の教育が必要。

### ●豊中市保健所(2グループに分かれて意見交換を実施)

- 転退院調整については、待機期間が必要な場合もあるが、比較的円滑な連携を行っている医療機関が多い。
- 救急医療を積極的に行っている医療機関では、特に高齢者の骨折等の増加があり、病床が不足している
- 慢性期・回復期病院において患者が急性増悪した場合、転院を依頼する急性期病院に受け入れ病床がなく、転院を断られることがある。
- 今後の医師の働き方改革により勤務時間やインターバル等に規制がかかれば、今後の夜間診療に影響が及ぶ。

- 急性期病院で診療した後、ポストアキュートへの転院をスムーズにすることが必要であり、病院の役割、患者情報や適応を明確にして連携パスを作成し、活用する試みをしてはどうか。
- 転院時の患者・家族説明では、転院先の医療機関に診療方針を任せ、転院先で改めて説明するという流れを作った方がよい。
- 豊中市内の病院は、豊中市病院連絡協議会において常に話し合う機会があるため、病院連絡会で豊中市内病院のグループ別意見交換は必要としない。

●吹田市保健所

- 高度急性期、急性期病床について、入院1日目、2日目の早期に転院できる仕組みづくりを進めていく必要がある。
- ICT等を用いた転退院調整の仕組みを、地域全体の様々な病院と構築できれば、より円滑に転退院が進むのではないか。
- 患者本人や家族への病状説明等についての情報共有が、システム上でできれば受け入れ側は助かる。

【テーマ：人材確保について】

●吹田市保健所

- 看護師不足が課題である。看護師数を増やしたいが、質を担保する必要もある。採用試験の回数を増やすことや中途採用者を増やすことで対応が可能。
- 慢性的に人材不足である。リハビリ職を含むさまざまな職種で助け合わないと対応できない。
- 特定行為（PICCの手技）の看護師を養成することで、新たに看護師を集めることができるのではないか。
- 1時間から取得できる有給休暇制度を導入し、働きやすい環境づくりに努めることが必要。